



怪姦奇譚

Rewrite 01

式宮幽二



# 目次



それは淫らな壁のシミ





## それは淫らな壁のシミ

拓郎たくろうは教室に忘れ物をしたことを思い出した。不真面目か、あるいは楽観的な性分だったのならば、そのまま放っておくところだが、彼は違った。幸いにも気付いたのは日が沈む前で、帰宅部だった彼が学校へ戻ったときには、グラウンドではサッカー部が後片付けをしていた。教室にはもう誰もなく、西日に照らされて燃え上がるようだった。カーテンが微かに揺れている。本当なら日直が閉めなくてはならないのだが、忘れてしまったらしい。しかたないなと思いつつ、窓に近づけば仄かに磯の香りがした。拓郎はこういう香りを経験上、雨が降る前兆と捉えていた。急いで帰らなくては。窓を閉めて、机の中の忘れ物を鞆に詰めた。

その目の前に突如として女が現れた。本当に、突如、としか言いようがなかった。

教室という隠れることの難しい空間で、拓郎は彼女が近づいてくることに、直前までまるで気付かなかったのだ。気付いた時にはもう目の前。手の届く距離だ。歳は二十代後半くらい。誰かの保護者だろうか。あるいは新任の教師だろうか。

いや、そのどちらでもない、拓郎は直感していた。格好が、らしくない。ノースリーブの

黒のワンピース。胸元は大きく開かれており、青少年の目に毒。やけに髪は長く、西日に照らされてなお黒く。前髪の隙間から覗く憂いを帯びた目に、艶めかしい口元の黒子。微かに浮かべた笑みも、どこか妖艶だった。

「えっと……あなたは？」

問うても彼女は笑みを絶やさず、クスクスと。

かと思いや彼の手をそっと取って自身の胸に這わせた。

拓郎はギョツとして離れようとするも、女の力は思いのほか強くて、ビクともしない。それどころか良いように動かされ、自らの意思に反して女のたわわに実った胸を、むに、ぐにゆりと弄繰り回す手伝いをさせられてしまう。

「やめてください！」

そんな声を上げても彼女の支配が解かれることはなかった。煽るかのように手を奥へと差し込まれる。初めて触れる女性のしっとりした肌や、それとは明らかに別の硬さを持つ突起のような存在に、拓郎が思わず生唾を飲めば、肩紐するりと落ちて、胸が片方、ぶるんと零れた。支えを失い、その重みから少しは垂れ下がったものの、褐色の乳首はツンと上を向いている。

拓郎の下半身もまた上を向こうとしていた。ただ、理性のほうはまだ上回っていた。

女がずいっと身を寄せてきて、逃れる間もなく唇に吸い付かれてしまう。

ちゅ。ちゅ。ちゅぱ。ぺちや。ちゅぷ。ぢゅう。ぢゅる。

初めこそ啄むようだったそれは、やがて舌が唇を分け入るようになり、女の唾液を注がれ、舌に舌を絡みつかれ、歯をなぞられ、女に唾液を吸い上げられて、次第に拓郎は、意識に靄もやの掛かるような感覚に襲われた。

女は何者なのか。自分はなぜ、ここにいるのか。そんな疑問はどうでもよくなっていった。下半身の昂りも堪えようだなんて思いはなくなり、ガチガチだった。ズボンが窮屈。鬱陶しい。助けて欲しい。助けて。

そんな懇願の色が彼の目に浮かんだのを見て取ったのか、背中に回されていた女の手が下に滑っていき、腰を経て前へと回る。そしてズボン越しに若い勃起チンポを挿んだ。ぐにぐにと揉みしだかれ、拓郎は「あっ、あっ」と情けない声を漏らしながら腰を引いた。しかし本音は、もっとして欲しい。もっとと直接、もっとと気持ちよく。だから腰を引いてみたところで、たかが知れていた。

女の指がチャックを掴むのがわかると、その目は期待の色に染まった。ジリジリと、焦らすように降ろされていき、内側へと細い指が這はい入り込む。トランクスの股間部を開かれ、硬く熱く、そそり勃つたものは遂に外へ。亀頭は我慢汁ですでに濡れていた。

女が竿を玉のほうから先っぽに向かって指先で撫でていく。今更そんなものでは焦らされるばかりの拓郎はまるで犬だ。吐息を「ハッハッ」と漏らして、腰を左右によじった。

女が目を三日月のように細めるや否や、人差し指と親指で拓郎の根本をぎゅっと握りしめる。

「おっふ」

「ふふ。可愛い子」

女の手が滑らかにギンギンに勃起したチンポをしごいていく。

シュツ……シュツ……シュツ……。

ゆっくり、焦らすつもりなのかと拓郎は思った。ここまで来て酷すぎる。

が、しかし。いきなり女はしごきを加速、いや最高速へと達した。

シュシュシュシュシュシュシュシュシュシュ!!

「いっ、あ、おっ！ そんないきなり、あ、あっあああ射精る射精る射精る！」

びゅっ！ びゆるるるるっ！ びゆるっ！

腰を跳ね上げながら、青臭くドロツとした精液を吐き出す拓郎。ただでさえ靄掛かった頭が余計にぼんやりするようだった。女に顔を寄せられて、自らその唇に吸い付いた。

二度、三度交すと、女は体にピツタリ張り付いたまま、スススと腰を落としていった。まだ勃起しているチンポを前にし、うっとりした表情で見上げてくる。そして口を大きく開いた。

チロチロと蛇の如くのたうち回る舌先に、ついさっきまで口を犯されていたことを思い出す。それが精液で汚れた亀頭に迫って——ぢゅぽ♡ 一気に根元まで啜えられた。

女は美しい顔を淫らに歪め、亀頭に向かって啜り上げながらも舌を絡ませる。

ぢゆるるるっ♡ ぢゅりゆるるるりゅっ♡

亀頭まで来るとまた飲み込むようにしながら、のたうち回る蛇のような舌で亀頭を、カリを、竿を、しゃぶる。射精したばかりの敏感チンポを激しく攻め立てられ、拓郎は思わず腰を引く。今度はそぶりではなく、本当に逃げようとした。

「おっひ、ぐん、おあ！」

だが女は両腕を腰にガッシリ回している。

拓郎はバランスを崩し尻餅をついた、その衝撃で、二度目の射精。

「あぁっあっ！」

ぢゅっぢゅううるっぢゅぢゅぢゅうううう♥ちゅぽんっ♥

二度目でも、若いからかなお濃厚なプルプル精液を、女は

「ごっつくん」

と、これ見よがしに嘸下した。

そして立ち上がればスカートをふわっと舞い上げる。湿り気を帯びた黒き密林が露わになる。拓郎に跨るようにすれば彼は力なく、首を左右に振った。

「も、もう」

彼の下半身は別の生き物になってしまったのか、その言葉に反してまだ元気なままだった。天を突くかのように怒張して、雄の威容を放つ。ならば当然、女が許すはずがない。

「だぁめ」

両脚をガバツと開き、狙いを定めて腰を落とす。ぬちやり。成熟した雌の香り立つ密壺に、ギンギン勃起チンポが飲み込まれていく。ぐちやあ、ぬちゆ。わななく肉襷をかき分けていく。「素敵よ、あなた。あつ、は、うん！」

最奥に到達すると、女は少年の胸板に手をつき前屈みになった。目の前で豊満な乳房が乱れ誘う。あまりにも蠱惑的で本能を呼び起こされる動きに、チンポは限界を超えてそそり立つ。一方、下半身を淫猥なベールに包み隠され、恐れにも似た感情も沸きあがる。

「ねえ？ 気持ちよくなりましょお？」

女がゆっくりと腰をあげていく。絡みつく肉襷、壁のざらつき。自分の大切なチンポが他人のものになっていく感覚。金玉がぎゅんぎゅん震えて精液を作っていく。でも、亀頭が抜けてしまいそうだ。きつと抜こうとしているんだ、だから大丈夫だ。拓郎は、ぼんやりした頭で、そんなことを思った。

けれど女は当然、チンポがおまんこから抜けきる前に、女はズンツ♥ と、腰を打ち付ける。そして熱い吐息を漏らすのだった。

「あつああんっ」

女はまるで相手のことなど考えないような、激しい腰捌きだった。

「はあ、んっ、あつは。素敵よ、あなた。若い子のおチンポ、癖になるう！ あつあつ、は」  
じゅぶ、ぐちゆ、ぬちや——水気のある音を交えながら、パンパンパンパン——肉に肉が

ぶつかる音が夕闇に包まれた教室に響く。女が拓郎の両手を取って自らの胸を揉みしだかせる。「んっ、はんっ……ほらあ、乳首もお」

拓郎はもはや、か細く呻くばかりで虚ろな目をして女の言いなりとなっていた。奇怪な女の、女による女のための、肉パイプ。女が情欲を満たすためだけに存在できる、性玩具だった。

「あはっ、ああん。もっと乳首、コリコリしてえ。あっ、あっ、そう、いいわ！」  
絶頂が近いのか、女は少年の胸にしなだれかかり、唇に吸い付く。

ちゅ♥ちゅぽ♥れる♥ペろ♥ちゅぷ♥ちゅ♥ぢゅうううううっ♥ぢゆる♥  
大きな尻がいつそう速く上下に振られ、尻たぶがぶるぶる波打つ。

パンパンパンパンパンパンパンパンパン！  
拓郎の体がガクガク震え、

「お」  
と、一つ鳴いたかと思えば、その下半身がビクンッと大きく跳ねた。

ビュッ——ビュルルルルルルルルルル——ビュビュッ——ビュ——！  
「あはあんっ、あっ、イクイク、イククうううっ！」

青臭い汁を吐き出すチンポに女の肉襷一つ一つが、ねっとり絡みつく。ばかりか、全身でも絡みつき、一滴残らず搾りだすかのように、わなないた。

体の痙攣が治まるにつれて、女は甘い息を吐く。

「はあーっ、はあーっ、はあーっ……！ 素敵よ、あなた。もっと、しましょ……？」

女が、なお膺をきゆうきゆう躍動させながら、うっとりとした視線を拓郎に送る一方、その拓郎は涎を垂らして放心顔。だが極めて異常なことに、その股間は固く固く勃起し続けていた。女は唇から真っ赤な舌を覗かせる。女体を伝い、拓郎の腹へと汗が落ち、へそに流れていく。

ふと女が視線を外す。その先にあるのは夕闇だけ。——いや、一人の少女が忽然と現れた。

彼女も、黒き女と同じく、闇そのものめいたワンピースに身を包んでいた。目元には黒子あり。まるで母娘のよう。そう、女と比べると少女は、だいぶ幼い印象を与える。中学生か、そこら。髪はボブ程度に揃えられている。胸も決して大きいとは言えない。それでも全身から漂う色香、淫靡な雌の微笑は女とよく似ていた。

少女が、か細い声で問う。

「ママ？ その人が新しいパパ？」

「ええ。そうよ。お前も、ほら、可愛がってもらいなさい」

女が拓郎の上から退くと、彼の目に、にわかになが戻るようだった。その目が見たものは、幼さの残る少女が、自らスカートの両端を指で摘み、スススとたくし上げていく様。つるんとした陰部には一本筋の、ほんの僅かに左右に開いて、肉襞と淫蓄が、気恥ずかしそうに姿を覗かせている。

娘は煽るように腰をくねらせた。そして、ぐったり仰向けでいる拓郎の足先に座ると、上体

を逸らしながら両手を床につき、ぐいっと腰を前へ突き出す。ぴとっ。幼い割れ目が、精液と愛液とにまみれた肉棒に押し付けられる。それら淫液を、自身の猥裂に塗りたくるかのように、縦に動かしていく。

「あん、やっ……」

ぬるん♥ぬりゅん♥

「んっ、あん、あっ」

ぬりゅ♥ぬりゅるん♥

「あうん、はあん。パパのチンポ、ガッチガチい。あっ、あっ、あっ」

ぬるるん♥ぬりゅん♥くちゅん♥

卑猥な音と汁をまとい、てらてらと光る少女の筋。その筋自身もまた、淫猥な蜜をとろんと零し始めていた。準備万端。そう言わんばかりに娘は舌なめずり。立ち上がって、おまんこを両手の指で広げた。途端に薄桃色した雌粘膜から、透明な糸が、つーつと垂れ下がり、拓郎の尿道口に染み入れば、勃起チンポがピクンと震える。

「えへへ。可愛い、パパチンポ。ね、ママ」

「可愛いだけじゃないのよ」

「そうなの？ 楽しみ」

娘は両脚をはしたなく開きながら、割れ目に亀頭をあてがった。

「んっ……ほんとだ、おっきい」

「うふふ。手伝いましようか」

母親がいたずらっ子めいた笑みを浮かべ娘の背後に回る。

「え？ あんっ、ママ、待っ——」

そして両肩を掴むとグイっと下に押し込んだ。

ずぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶんっ♥

「あっ、あああああんっ！」

娘は腋をきゅっと閉め、喉をのけ反らせながら嬌声をあげる。強引にこじ開けられた膣内はチンポをキュンキュン掴んで離そうとしない。その絶え間ない搾精刺激に、間もなく拓郎は四度目の射精。生命が溢れるかのような濃密な精液を、少女子宮めがけて吐きかけた。

「マ……ママあ……きゅうに、ひどいよお」

「ふふ。ごめんなさい。でも気持ちよかったでしょう？」

娘は思わず垂らした涎を舌で舐め取り頷いた。

「うん、とっても。パパも気持ちよかったよね？」

拓郎は何も答えない。

娘はそれでも気にすることなく、スカートをたくし上げ、自分と彼との繋がりを見せつけるようにして、チンポを根元まで咥えこんだまま、前後にこすり付けるように腰を動かす。

「あつ、あん、ああんっ！ チンポ！ パパチンポいいの！」  
あるいは円を描くように。

「はっはっ、はあっ！ んっ、あ、はん！ パパ、パパあ！ わたしのおまんこ気持ちいい？  
気持ちいいよね？ わたしも気持ちいいっ。パパチンポすき。すきっ！ あんっ、ああっ！」  
母親も見ているだけではやはり物足りないのか、拓郎の顔にぐしよ濡れた恥部を押し付けた。  
「あなたあ、私も可愛がってえ！ ほら、ほら、おまんこ舐めてっ。ペろペろして！ あっ、  
やんっ、あんっ。そうよ、あなた、いいわっ。あんっ、お豆。それ、もっとお、お豆、ちゅー  
してえっ！」

「パパっ、パパあっ！ おまんこ、またイキそうだよ、パパっ。あんっ、やつ、あんっあっあ、  
はあんっ。あっあっあっ。パパチンポっ。奥っ、コリコリ、すきっ！ もっとコリコリっ！」  
「私も、イッチャうううっ。お豆ちゅーちゅーでイクっ、イクイクイクっ」

「コリっコリって、おまんこの奥、気持ちいいっ！ あんっ、あっあっ、はんっ！ イク！  
イク！ イク！」

「一緒にイキましよ、一緒にいっ！」

「うん、あ、はっ、ああん、ママおまんこパパチンポと、イク！ イクっ！ あっああっ！」  
「イクっイクイクイクっ、ああああああんっ！」

母親の茂みからは潮がプシャッと噴き出して、娘の小ぶりな尻がガクガク震えた。

同時に拓郎の勃起チンポも、勢い衰えない吐精。  
ビュリユルルルルルルルルルルルルルルルッ！

——それでも、母娘の淫猥なる共演に、終わりはない。  
彼が全てを吐き出すまで、ずっと。



「そういや」

「うん？」

「なんでうちのクラスは椅子が一つ、空いてるんだらうな？」

「うーん……？ 転校生の予定でもあんじゃね？」

「ああ、そっか。あとさ、もいっこ気になったんだけどさ

「なによ？」

「最近さー、あの教室のシミ、大きくなった気しない？」

「あー？ そうかあ？ 気のせいじゃねえか？」

ある学校の教室には、シミがある。それは、何度塗りつぶしても、やがては浮かび上がって

きてしまうのだそう。誰かが言った。双首ふたくびのシミ、と。確かにそう言われてみれば、胴体一つ、頭が二つの影に見えなくもなかった。

ただそれは、彼らの世代での姿。

十数年前の世代では、違う姿をしていた。

「いや、絶対に大きくなっただって。だってほら、今は——」  
もっとも今は、そのときの姿に戻っているようだったが。

「——首が三つあるみたいじゃん」

# 怪姦奇譚

Rewrite 01

2019年06月07日 初 版

2019年06月17日 第二版

発 行 姪染夢弐庵

著 者 弐宮幽二

Mail [yu2.2nomiya@gmail.com](mailto:yu2.2nomiya@gmail.com)

Twitter ID [yu2nomiya](#)

Pixiv ID 40288603

ノクターンノベルズ ID X1492H

※ ※ ※ ※ ※

本書の内容は全てフィクションです。実在の人物、団体、その他とは一切関係ありません。本書は犯罪を教唆するものではありません。決して真似しないでください。

本書の、現実とフィクションの区別がつかない方の購入、閲覧を禁止します。本書の、満18歳未満の方の購入、閲覧を禁止します。保管される際は、18歳未満の方の目に触れないよう、ご注意ください。本書の、無断転載および複写、複製、WEB上へのアップロードを禁止します。

※ ※ ※ ※ ※

◎この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)